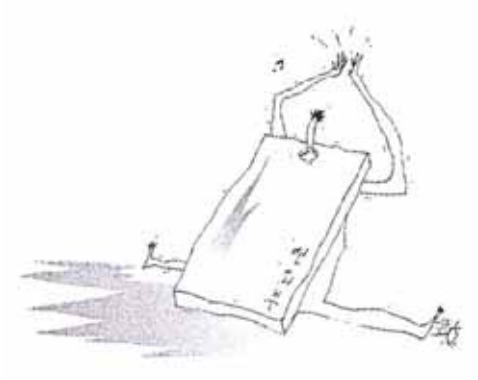
偽造品

第３編５章

つぐない（償罪）の教えに付加された二つの補足：免罪符と煉獄について



私たちは神が許され、定められているものだけを祈ることができます。神が一度も許されたことがない死んだ者のための祈りは神に対する祈りを汚すことになるのです。偽造品を作り出す者はこの世の人々の無知と恐れを利用して卑劣な商売をして、その汚れた欲望を満たしているのです（マタイ 21:13；ルカ 19:46）。

偽造紙幣、偽造陶器、偽造絵画、偽造身分証明書など世界には偽造品が溢れています。私たちも騙されないように用心しなければなりません。偽造品は人を騙すために本物とそっくりに作られています。多額の金銭を払って、苦労してその偽造品を買った人々はそれが偽造品だと言うことに気づいていません。自分が手に入れたものが偽造品だと分かったとき、それを売りつけた人を恨んだり、買った自分を責めても後の祭りです。ローマ教会は偽物の鍵と共にもう一つ驚くべき偽造品を作り出しました。それで偽物の鍵を補充しようとしたのです。それが免罪符と煉獄の教えです。

第１節　免罪符の教理はキリストの血を汚す破廉恥な創作物です。

自分のある行為で神の義を満足させ、罪責だけではなく、罪の刑罰まで完全に免罪されることができるという教理がつぐないの教えです。このようなつぐないの教えから免罪符という息子が生まれました。自分の力でつぐないをなしてもなおその人の力が余るときには他の人の功労としてそれを貸し出すことができると言うことが免罪符の根拠となりました。免罪符を通して貸し出される功労はキリストの聖なる使徒たちと殉教者たちの功労であると言うのです。その功労が教会の倉庫に蓄えられ、その倉庫の鍵をあずかっているローマ教会の主教たちがその偉大なる恵みの分配を管理していると教えるのです。直接、あるいは委託を通じてそれらは分配されます。完全な免罪符（大赦）と数年間の免罪符は教皇が発行し、100 日間のものは枢機卿が、そして 40 日間のものは主教が発行することができると言うのです（アキナス、神学大全３）。

しかしこのような主張は悪魔のたくらみに過ぎません。神の恵みとキリストの命からキリスト

者を引き離し、純粋な真理の道から迷い出させようとするものなのです。キリストの血が枯渇してしまったとでも言うのでしょうか。罪を赦すためにキリストの血を補う何かが必要であるとでも言うのでしょうか。彼らはキリストの血と殉教者の血を混ぜこぜにしています。その上でその混ぜこぜにされた血が教会の宝庫になったと言うのです。このようにしてキリストの血を汚すことが許されてよいのでしょうか。

福音は私たちすべてがキリストの御名によって罪の赦しを受けると教えています（使徒 10:43；ヨハネ一 1:7）。しかし、免罪符はペトロとパウロと殉教者たちの名によって罪の赦しを受けなさいと主張するのです。また福音は私たちがキリストによって神の義とされると教えています（コリント二 5:21；コリント一 1:3）。しかし、免罪符は私たちに殉教者の義と血が必要だと主張するのです。

福音はキリストの血で教会は買い取られたと証言しています（使徒 20:28）。免罪符は殉教者の血が教会を買い取る代価とされたと語るのです。また福音はキリストお一人だけが献げ物となられて聖なる者たちを永遠に完全な者となさったと語っています（ヘブライ 10:14；黙示 7:14）。免罪符は殉教者たちがいなければ私たちは聖なる者として完全にされることはないと言っています。こうなると福音と免罪符の二つの中の一つは誤りだと言うことは明らかではないでしょうか。免罪符は偽造された福音なのです。

第２節　免罪符を主張する者たちは聖書を自分の思い通りに解釈しています。

パウロはキリストの苦しみのかけたところを身をもって満たしていると語っています（コロサイ 1:24）。キリストがご自分の身体でただ一度受けられた苦しみを今、彼の身体を通して毎日受けていると言う意味です。つまり、この言葉は私たちが教会のために受ける苦しみをキリストはご自分の苦しみと見なしてくださると言う偉大な信仰の告白でもあるのです。私たちにとってそれはこの上ない栄光です。苦しみのかけたところとは教会の贖いや和解やつぐないのためのものではありません。それは教会を建てあげるために必要なものなのです。

しかし、免罪符を作り出した人々はここでパウロが後の教会に与えるための功労を自分の身体で満たしたと主張するのです。それは偽造品を何とか正当化しようとする偽りの言葉でしかありません。アウグスチヌスの言葉のように使徒たちは教会を贖うために彼らの自身で代価を支払ったのではなく、イエスがその代価を支払われたことを伝えただけなのです。使徒たちはキリストの欠けた功労を満たしたのではなく、キリストのように自分も教会のために苦しみを受けたと告白したのです。使徒たちが選ばれた者たちを救うために苦しみにあったと言うのはその代価を支払ったと言うことではなく、すでに代価を十分に支払ってくださったキリストを証言したと言う意味なのです（テモテ二 2:10；コリント二 1:6；ローマ 15:19；コリント一 1:17、23；コリント二 5:18～21 参照）。

ローマの主教であったレオ（440~461 年）もパレスチナ教会に送った文章であからさまに免罪符を攻撃しました。聖なる信徒たちの死を主は尊いものと見なしてくださいますが（詩 116:15）、しかし殉教者の死がこの世のための和解の献げ物となったことはありません。彼らはそれぞれ自分の死を死んだのですがその死で他の人の負債を支払ったのではありません。

私たちにはただ主イエスお一人がおられ、彼によってすべての人が十字架で死に、葬られ、復活したのです。アウグスチヌスも直接的な言葉で警告しています。私たちは兄弟として他の兄弟

のために死ぬことはできるが、そのようにして流された血や、殉教者の血は罪を赦すためのものにはなり得ません。それらのことはキリストがすでに私たちのためにすべてなし終えておられるのです。私たちが主から受ける恵みはそれを模倣するためのものではなく、その恵みを喜ぶためにあるのです。

第３節　煉獄（浄罪界）の教えは免罪符に負けず劣らないもう一つの悪しき創作物です。

煉獄については既に多くの批判があり、もうこれ以上、語る必要はないと考える人たちもいます（ルター）。しかし、煉獄の教えはたくさんの冒涜を作り出して、その新たな冒涜を毎日支えていて、様々な重大な罪を生産させているのですから見過ごすことはできません。むしろ私たちは腹の底から大きな声をだして煉獄こそがサタンが作り出した致命的虚偽であることを叫ばなければなりません。

煉獄はキリストの十字架を水の泡にさせ、神の慈しみを冒涜し、私たちの信仰を逆戻りさせるものです。煉獄とは何でしょうか。ローマ教会が作り出した「つぐない」と言う妄想が崩れれば、この煉獄自体も根こそぎ消滅してしまうものではないでしょうか。もし、既に私たちが強調した通りにキリストの血が信者の罪のための唯一の償い、唯一の贖罪、唯一の聖化の手段であるということが明らかであれば、煉獄はキリストに対する恐るべき冒涜に過ぎないと言うほかないでしょう。

第４節　彼らはでたらめに聖書を解釈して煉獄を作り出しています。

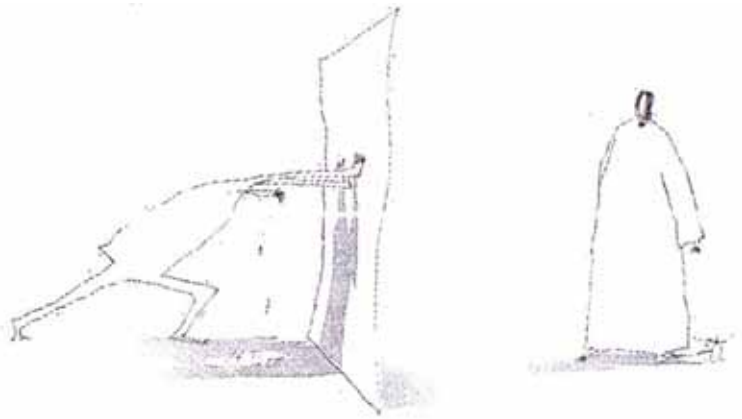
この偽造品生産工場の人々は自分たちの習慣に従って聖書を非常識に解釈しながら決して自分たちの主張を曲げようとはしないのです。まず彼らは福音書の言葉から自分たちの味方を探し出そうとします。「聖霊に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない」（マタイ 12:32）。この聖書の言葉を解釈しながら彼らはこれは後の世で赦される罪があると言う事実を暗示させる言葉だと語るのです（ロンバルドゥス、命題集 4-11.1）。

しかし、何の先入観もなくこの言葉を読むならば、どうしてここから煉獄についての教えを見つけ出すことができるでしょうか。それは不可能に違いありません。むしろこの言葉は聖霊に言い逆らう罪の責任がどんなに重い罪であるかを強調するものなのです。また彼らはフィリピの信徒への手紙（2:10）を例に上げます。天にあるものや地の上にあるものがイエスの御名にひざまずくようにされるという使徒パウロの言葉から地の下にあるものこそ煉獄にいる魂たちだと説明するのです。

しかしここで使徒は単純にすべての支配権を受けられたキリストにすべての被造物が服従するようになると言う言葉を語っているのです（黙示 5:13、詩 19:1 参照）。むしろこの地の下にあるものは煉獄にいる者たちと言うよりはやがて神の裁きの前に引き出される恐怖と戦慄で裁き主を覚える悪魔たちを意味していると読む方がより正統な解釈であると言えます(参照、ローマ 14:10、11；詩 45:23)。

彼らがマカバイ王朝の歴史から引用すること（マカバイ記二 12:43）も答える価値がないものです。なぜなら私たちはこの書物を正典として認めていないためです。彼らはアウグスチヌスがその本を正典として認めていると言っていますが、実際にアウグスチヌスは慎重に読むならば信仰生活の助けになる程度の書物であると考えていたのです（アウグスチヌス、ドナトゥス派の司

教ガウデンティウスを駁す 1-31,38)。



さらにヒエロニムスは何の躊躇もなしにマカバイ記は教理を証明するところでは無価値なものとその権威を無視しています（ソロモンの書への序言)。また、何よりもマカバイ記の著者自らが一番最後の部分で自分に誤りがあるならば許してほしいと願っているのです（マカバイ記二 15：39)。このような文章が記された書物を聖霊が与えてくださったみ言葉だと確信することができるでしょうか。

彼らのように偽りの言葉を語る者たちはパウロの次のような言葉を拡大解釈しています。「この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです」（コリント一 3：12,13)。彼らはこの火が煉獄の火ではないかと意気揚々と主張するのです。私たちはすべて煉獄の火で浄化されて天国に入るようにされると言うのです。それならば使徒たちと殉教者たちも皆、この煉獄の火を通過しなければならないのでしょうか。たぶん彼らはとんでもないと手を振ることでしょう。信徒たちに無限な恵みを与えるという殉教者たちがそのようにしなければならなかったとは決して言えないからです。しかし、使徒は一部の者ではなく、すべての人の仕事が吟味されなければならないとここではっきりと言っているのです。

ここでパウロは彼らがある行為のために火を通過しなければならないと言っているのではなく、もし彼らが最大の忠誠をもって教会を建設したならば、その仕事は火で試みられた後に報いを受けるだろうと語っているのです。そして聖霊の火が人の頭から作り出された教理（木や草やわら）を焼き払い、ただ主の真理（金、銀、宝石）だけが栄光に輝くようにさせると言っているのです。繰り返して言えば、ここでのやがて救われる人々とはふさわしい土台の上に立ちながらも、自分の作り上げたものを神の言葉と混ぜ合わせて教会を立てようとする人たちのことです。彼らは信仰の重要で不可欠な教理から離れてはいないのですが、より危険のすくない部分の教理で道を踏みはずした人たちです。(彼らの誤りは聖霊の力によって汚れが取り除かれ彼ら自身は救いを受けると言う意味になる)。

さらに彼らはもう一度それらの偽造品を持ち出して初代教会に訴え出ています。煉獄説は教会が昔から守ってきた長い習慣であると言うのです（アキナス)。しかし、神の言葉も啓示もどのような範例の一つも彼らの言葉を支持してくれるものはないのです。もちろん、異教徒たちの間では死んだ者たちのための儀式があって、毎年彼らの霊魂を供養するための儀式が行われています。そしていつの間にか異邦人たちを騙したサタンのそのようなたくらみを教会がまるで競争でもするように受け入れてしまったのです。

その上でいったんそのように教会の内に入り込んだ過ちはその後に引き続いて強化され、新たな追加がなされ、発展して来たのです。もちろん昔の教父たちもその誤謬に襲われていたのは事実です。しかし、アウグスチヌスを初め多くの教父たちは死んだ者のための祈りについて薦めるときにはむしろためらいを覚えています。そして多くの疑念を示し、死んだ者のために人々が抱く熱心を冷まそうとしているのです（アウグスチヌス　死者のためになされるべき配慮について）。

彼らがそこで述べている唯一の根拠はこの習慣は長く守られているため軽視してはならないという程度のものに過ぎないのです。しかしその一方で、アウグスチヌスが明らかにしているように、すべての信者は預言者や殉教者や使徒と同じく死んだ後にすぐに祝福された状態に入れられるのです。そして私たちは神が許され、定められているものだけを祈ることができます。神が一度も許されたことがない死んだ者のための祈りは神に対する祈りを汚すことになるのです。偽造品を作り出す者はこの世の人々の無知と恐れを利用して卑劣な商売をして、その汚れた欲望を満たしているのです（マタイ 21:13；ルカ 19:46）。

結びの言葉

偽造品の目的は明らかです。嘘を嘘で塗り固めて無知な人々を騙し、彼らから利益を得ようとするのです。ローマ教会の悔い改めについての教えは偽造されたものです。告解制度と償いについての教えも、そして免罪符と煉獄についての偽りの教えも同じです。この世にはいまだに偽造品を購入して、単にその値段が高かったと言って自慢している愚かな人々が多いのです。